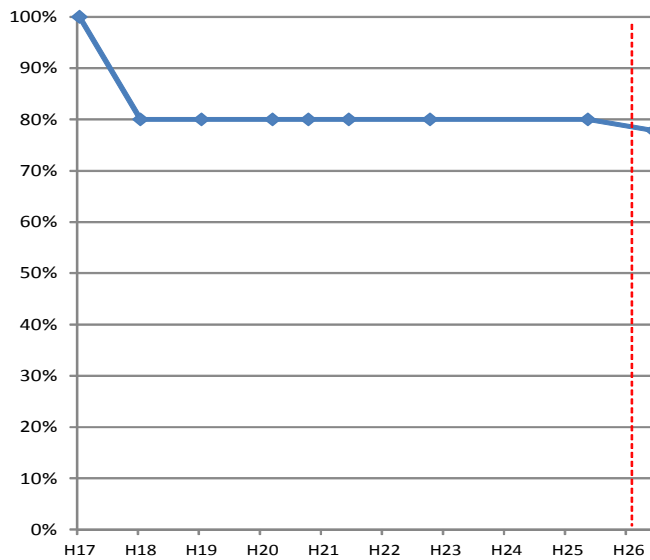


樹種名	フウ	
科目	フウ科	
学名	<i>Liquidambar formosana</i>	
分布	フウ属の落葉高木であり、原産地は台湾、中国南部に分布する。 日本には江戸時代中期、享保年間に渡来した。同属のモミジバフウとともに並木や公園などに植栽され、繁殖力が旺盛である。	
樹木特性	日本には、享保年間に渡来し、馴染み深い樹種である。 古くから公園などに植栽されてきたが、近年では街路樹に使われることが多くなり、目立つようになってきた。漢字では「楓」であり、これが本来のカエデであるのかもしれない。	
用途	街路樹、公園樹として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	18本 (他樹種との混植)	
特徴	<p>【樹形】 樹高は 20m ほどになるとされるが、原産地では 40~60m もの大木になり、樹形は主幹がよく伸びて針葉樹のような樹形になる。</p> <p>フウの葉は互生であり、フウの葉は大きさの割には、平坦・平らな印象がある。長さは 7~15cm で3つに中裂し、やや長さよりも左右に長いものが多い。裂片の先端は長い尾状となり、縁には突端で終わる鋸歯がある。長い葉柄があり、長さ 8~10cm。葉柄の基部には、一对の線状の付属体がある。おそらく、托葉が葉柄の基部に合着したものである。葉柄と葉脈の基部は赤味を帯びることが多い。新葉時には葉柄や裏面に毛があるが、やがて脱落して少なくなる。若枝には褐色の毛が多い。4 月には葉の展開と同時に、枝先に総状の目立たない花を咲かせる。フウの紅葉は美しい。緑から黄色味を帯び、やがて紅色となる。</p> <p>庭木、街路樹、公園樹として利用される。</p> <p>近縁種にモミジバフウが知られる。これに対して本種をサンカクバフウまたはタイワンフウと呼ぶこともある。</p>	  
試験地での様子	ポット苗を植栽し、現存率、成長状況ともに良好であるが、一部にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が見られる。 成長量は大きく、植栽から 9 年で平均樹高は 11m 程度まで成長している。	
被害	一部にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害やヒモワタカイガラムシの発生が見られる。	

フウ 現存率



【現存率】

植栽後、コウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により2本が枯死した。

平成18年度以降の枯死は見られない。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は77.8%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

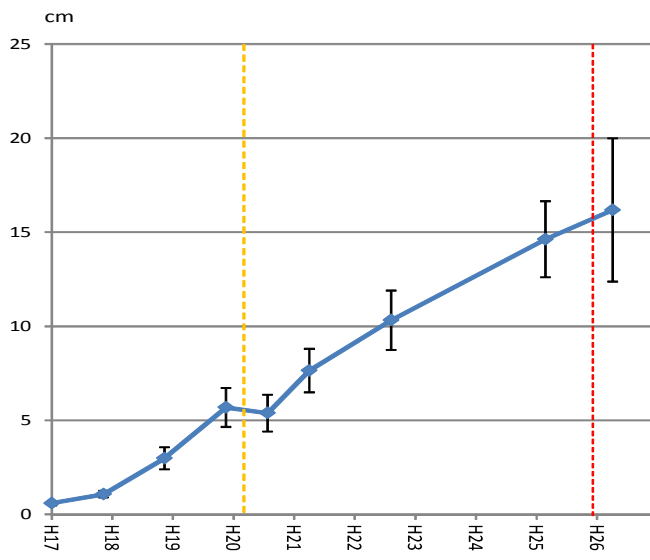
順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は16.18cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

フウ 根元・胸高直径



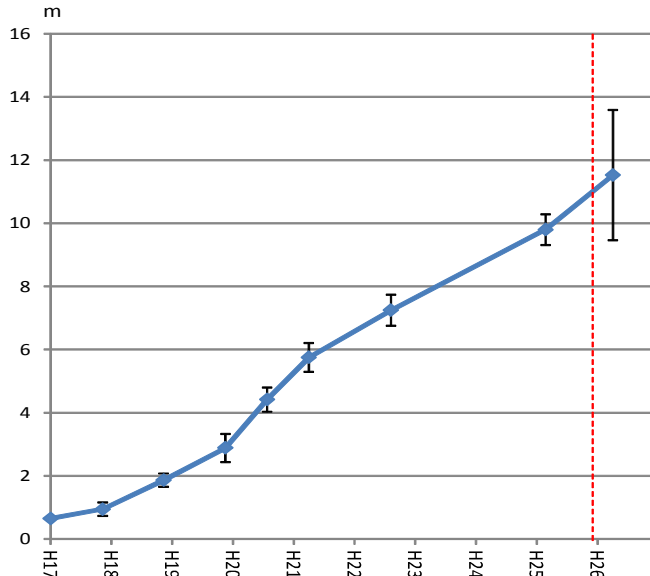
【樹高】

順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は11.53mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。






フウ 樹高



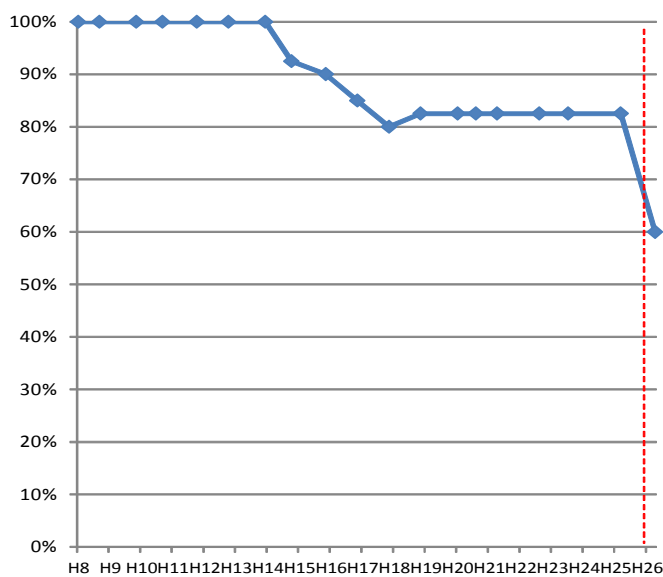
《プチ情報》

種名は「台湾の」の意味。別名、サンカクバフウ（三角葉楓）、台湾フウ（台湾楓）、イガカエデ（伊賀楓）、カモカエデ（賀茂楓）。古名、オカツラ（男桂）。

独特の香りのある樹脂を「楓香脂」として薬用にする。

樹種名	ブナ（別名：シロブナ）	
科 目	ブナ科	
学 名	<i>Fagus crenata</i>	
分 布	北海道南西部にある渡島半島以南から本州、四国、九州の山地に分布する。	
樹木特性	陰樹であり、温帯林の肥沃な土地で優占種として大群落を形成する。 萌芽は個体サイズが小さいときは萌芽能力をもっているが、成長するにつれしだいに弱まる。	
用 途	建築・器具・船舶材、盆栽にも利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	300本／0.06ha (5,000本／ha)	
特 徴	<p>【樹形】 ブナ（山毛櫨、樺、榊、栂、）は、落葉広葉樹で、温帯性落葉広葉樹林の主要構成種。大きいものは高さ 30m にも達するものがある。 樹皮は灰白色できめが細かく、よく地衣類などが着いて、独特の模様のように見える。葉は楕円形で、薄くてやや固め、縁は波打っている。雌雄同株で、花は春に咲き、雄花は枝先からぶら下がった柄の先に数個着いて、全体としては房状になる。雌花は枝先からしっかりした柄の先につく。果実は総苞片に包まれてその年の秋に成熟し、それが割れて散布される。 堅果は柄が短く、赤褐色で 10 月から 11 月に熟す。熟すと殻斗が 4 裂し、3 稜のある卵形の種子が、2 個出てくる。</p>	   
試験地での様子	<p>試験地設定当時は森林の多様性への期待が高まっていたことから、ブナの適地ではないが見本林として植栽した。 ポット苗を植栽し、植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生し、植栽された樹種の中では特に被害が大きかったが枯死には至らず、選定した調査木の現存率は 60% と比較的高い結果となった。また、成長量が小さいことから、下刈作業に多くの労力を要した。</p>	
被 害	植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。植栽された樹種の中では最も被害が大きかった。(延べ駆除本数 コウモリガ：9 本、カミキリムシ類：336 本)	

ブナ 現存率



【現存率】

植栽後、6年を経過した頃より、コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。

平成20年度以降の枯死は見られない。

林内の照度調整を図るため平成24年度に本数調整伐を実施した。

本数調整伐を実施した以外の調査木の現存率は84%（H25.6時点）である。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は60.0%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

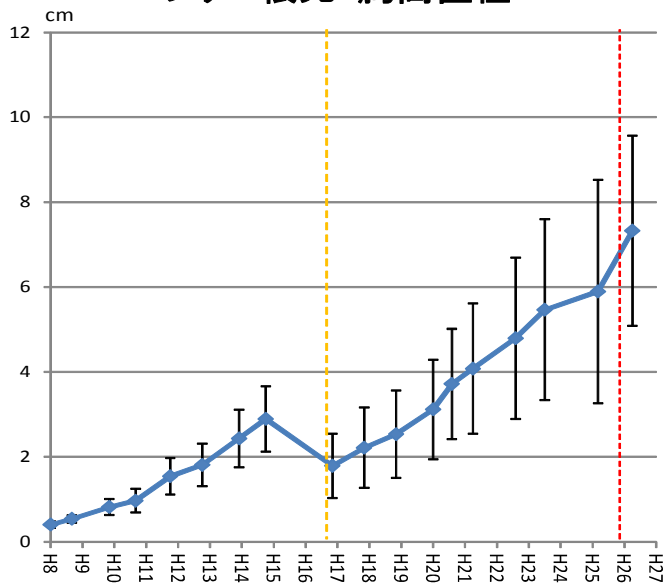
順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は7.33cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ブナ 根元・胸高直径



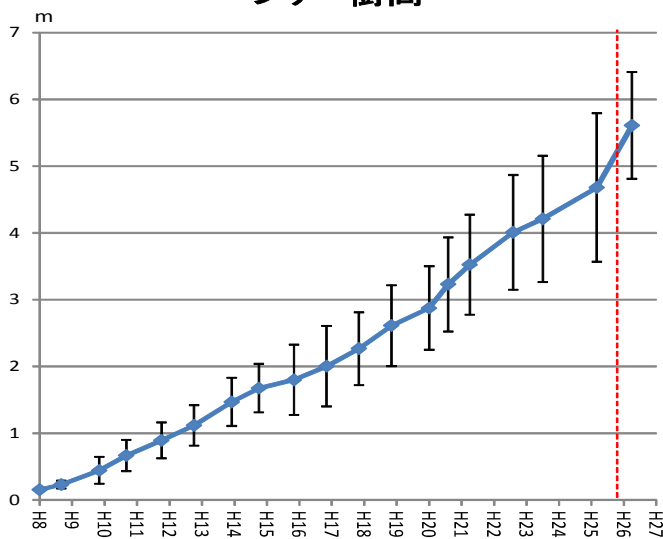
【樹高】

順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は5.61mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ブナ 樹高



《プチ情報》

材は腐りやすい上に加工後に曲がって狂いやすい性質があり、20世紀まで用材としては好まれなかった。平安時代後期から鎌倉・室町時代にかけては、漆器の椀・皿の普及品の材料として欠かせないものであった。

ブナは成長するにしたがって、根から毒素を出していく。そのため、一定の範囲に一番元気なブナだけが残り、残りのブナは衰弱して枯れてしまう。ところが、一定の範囲に2本のブナが双子のように生えている場合がある。これは、一つの実の中に2つある同一の遺伝子を持った種から成長したブナである。

世界遺産に登録された白神山地のブナ林は、まとまった天然林としては最後に残ったところである。太平洋側に降りると純林はあまり見られず、ミズナラなど他樹種との混交林をつくる。

南限のブナ林は鹿児島県高隈山にある。